こころ日記 「ぼちぼち」 part II

むかしは『登校拒否』

脇野 千恵

久しぶりの学校現場への復帰は、初めて体験することばかりでした。

当時は荒れていたこともあり、毎日の放課後は反社会行動をとる生徒対応に明け暮れていました。所属していた 1 年の教師集団は、新採の 20 代ばかり。学年主任は 30 歳そこそこ。先生達は本当に元気でした。生徒指導も、今なら体罰、人権問題として訴えられてもいいような対応だったと思います。

暴力・暴言？
スカートの丈を計る？
男子頭髪検査で頭に指を入れて図る？

校則を守らす指導ついては、本当に厳しいものでした。若いから許されるものではありませんが、おかしいなあと思っていた私自身も、流れに沿って、生徒たちに威圧的に対応していたと思います。今から思えば、申し訳ない思いです。

が、一方で当時の教師は、自分の教育観や子どもの将来について、よく語り合っていました。飲み会で、熱くなりすぎて喧嘩になることもあるくらいでしたから。（その当時のほとんどの教員は、今管理職になっていますが…。）

―目立たない M さん―

そんな 1 年生の集団の中に、毎日遅刻をしてくる M さんがいました。

やんちゃな生徒への対応に追われ、寡黙な彼女の存在感は、教員の中にはあまりなかったよ

うに思います。
　毎朝１時間目がおわるころ、校門前に一台の軽トラックが停まります。母親らしき人の大きな声が聞こえたかと思うと、自動車のドアが閉まる
「バアーン！」
という音。そして、エンジンの音が遠ざかっていきます。あとには、地面に置かれたカバンと共に、泣いているＭさんがぽつんと立っていました。
　しばらくして、とぼとぼと職員室までやって来ますが、誰かに声をかけてもらうまでじっと立ったままでした。担任をしていない私が、いつからか関わっていくようになりました。声をかけても、ほとんど何も発せず、会話などできませんでしたが。
　担任は、彼女が毎日遅刻することに気づいていましたが、とにかく学校に来ているのだからと、特に手を打つようなことはしていませんでした。一方で、母親の投げ捨てるかのように彼女を送り届ける様子に、職員室では、
「かわいそうやな、ひどい親や」
とうわさになっていました。
　１学期が終わるころ、毎日の母親の送りにも限界がきました。彼女の家は、魚を扱う自営業でした。家内業でもあったので、父母、祖父母と一家が切り盛りする中、とても末っ子である彼女に手をかけられなかったのではないかと…。
　やがて、自室から出なくなり、朝も起きてこないことが多くなりました。母親の乱暴な対応にも、頑として動かず泣くばかりでした。

　当時、学校に来られない生徒のことを「登校拒否」と言っていました。
　学校に行くのは当たり前の雰囲気の中、教員たちは生徒の家に行き、半ば強引に引っ張りだし、学校へ連れてくるということをしていました。いわゆる「登校刺激」です。これも生徒指導の一環で、親からも、そうしてくれる方が助かるといった声が聞こえていました。
　Ｍさんも例外なく、朝、担任が家庭訪問をして迎えに行くということが続けられました。
　Ｍさんの上の兄弟たちは、とても優秀で手のかからない子どもたちでした。家族の中でＭさんは、疎んじられているように見え、とくに母親は、寡黙でうじうじしたＭさんの態度にいつもイライラしていました。
　彼女と会話すらできない私ですが、担任と共に迎えにいくうちに、家にいても居場所のないＭさんは、遅刻をしながらも、少しずつ学校に足が向くようになっていきました。

―今は流行らない「交換ノート」―

　学校でのＭさんは、保健室通いをしながら、何とか教室に入り席について授業を受けていました。しかし、何せ荒れていた学校です。「いじめ」も多々ありました。彼女も当然、いじめの対象にされることがあり、
　「へんなやつ！」
　「きもい」
と言われていたように記憶しています。
　彼女は、何の抵抗する術も知らず、じっとうつむいているばかりでした。
　ある日、国語の授業後ノートを集めたときのことです。Ｍさんのノートを点検していると、彼女が作った詩が書かれているのを見つけました。黒板の字も写さず、ただじっと座っているＭさんですが、その詩は、とても抒情的で、彼女の内なる心を知ることができました。思わずコメントを書き添えて、ノートを返しました。
　その後、ノートを集める度に、彼女は、詩以外にも、私へのメッセージを書くようになりました。

・日頃、思っていること
・自分の好きなこと

・私への質問　　などです。

そんなやりとりをするうちに、寡黙な彼女だけれど、交換日記なら色々な思いを吐露してくれるのではないかと思いたち、交換ノートを提案しました。

その返事は、首を縦にするだけでしたが、受け入れてくれました。

その後、相変わらず遅刻を続ける彼女でしたが、真っ先に職員室にやってきて、そっと交換ノートを出し、下校時に職員室に寄り、私からノートを受け取るといった毎日が繰り返されました。

―「うさぎ」がともだち―

次の年、私は転勤をしなければならず、Ｍさんとは、１年間の付き合いでした。

やはり休みがちでしたが、中学校を卒業し農業系の高校に無事に入学しました。花や、自然、生き物が好きだった彼女なら、充実した時間が過ごせると思っていました。

しかし、新学期早々、登校できなくなり、困った中学校の元同僚から連絡があり、

「彼女が信頼していた先生なので、家庭訪問をしてやってくれないか…」

そのことがきっかけで、高校を退学した彼女は、私の家に遊びに来るようになりました。寡黙な子と思っていましたが、本当に色々なことを話すようになっていました。その当時我が家では、うさぎを飼っていました。引っ越しで貰い手がないか探していた矢先、Ｍさんはぜひ飼ってみたいと。しばらく、うさぎの様子を伝えるために、うさぎを連れて遊びに来ていました。

交換ノートは、彼女を理解するきっかけになりましたが、我が家のうさぎがＭさんに貰われていったことは、彼女に変化をもたらしたことは確かなようです。

２年前、２人の幼子を連れて買い物をするＭさんの姿を見かけました。母親になったのだなあと、ちょっと嬉しくなりました。